乳腺外科医が聞く患者さんの後悔のことば

有名な芸能人が乳がんになってネット上あるいは SNS などで話題になると多くの女性が一時的にせよ乳がんに関心をもってくれるので、一定の啓蒙効果となります。一番インパクトが強かったのが、2015 年に北斗晶さんが乳がんを公表した時です。

当院の乳腺外来も乳がんを心配する方でごった返すほどでしたし、乳がん検診を受ける方も瞬間的に急増しました。でもその効果は 1 か月も続かなかった気がします。

30 年くらい乳腺外来をやっていますが、乳房にしこりができて乳がんと診断された方の多くが漏らす言葉が、「検診を受けていれば・・・」です。

これは乳がんだけに限らないわけですが、検診で発見される乳がんのほとんどが早期ですので完治が望めるわけです。

日本人女性の中で最も罹患率が高いのが乳がんで、年間 10 万人くらいが乳がんとなってしまっています。そして今や日本人女性 9 人に 1 人が乳がんになる時代といわれています。

最近では、女優の梅宮アンナさんが乳がんとなって抗がん剤治療を受けていることを公表しています。彼女の公表によると、できてしまった乳がんは、浸潤性小葉癌だそうで、毎年受けていた人間ドックでも発見できなかったといいます。浸潤性小葉癌はマンモグラフィーや超音波検査で特徴的な所見があり、多くの場合は発見可能です。

どんな検査も 100%ということはないため、検診や人間ドックを受けていても発見できなかった乳がんというのも残念ながらわずかあるのですが、圧倒的に見つかるわけです。見つかる確率をより高くするために、検診検査の特徴も知っておく必要があります。例えば 40 歳代では乳腺の密度が濃いためにしこりが濃い乳腺の影に隠れて見つけづらい事かあります。そういう方には超音波検査が適しています。また、超音波検査では、マンモグラフィーで容易に見つかる「石灰化」を伴った乳癌が見つけづらいのです。お薦めは、マンモグラフィーと超音波検査を両方受ける事です。両方はどうも…という方は、30 歳代なら超音波検査、40 歳代ならマンモグラフィーと超音波検査を毎年交互に、50 歳以上はマンモグラフィー(できれば 2 方向)がいいです。

10 月はピンクリボン月間で、乳がん検診強化月間です。「あの時検診受けていれば」とならないよう検診を受けて自分を守りましょう！